

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 3 月 31 日現在

機関番号：18001

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2011

課題番号：20760415

研究課題名（和文）再整備された沖縄の御嶽の改変パターンの類型化と空間理念の研究

研究課題名（英文）A study of today's OKINAWAN folk perceptions of "UTAKI", describing the pattern and spatial concept

## 研究代表者

小野 尋子 (ONO HIROKO)

琉球大学・工学部・助教

研究者番号：20363658

研究成果の概要（和文）：沖縄の御嶽（うたき）を中心とする民俗空間は、自然拝みと先祖崇拝が渾然一体となった非常に特徴的な空間であるが、沖縄県内にある大多数の改変された民俗空間は開発調整にあたっての保全の位置づけも実際の行政指導や調整の過程では実質的な保全の手立てを持たないままの状態であった。

本研究では、都市的開発圧力の強い沖縄本島中南部に位置する基地移転集落に着目し、設計協議過程の議論や実現された空間の実測を行うことにより、戦後から現在までに地域住民のなかでどのように解釈され継承されたのかを明らかにした。その結果、風水の方位に関わる空間感覚、高所に対する神聖感、「火の神（ひのかん）」「根家（にーや）」など先祖崇拝に直接関与するものは継承されたものの、拝みや禁忌性を介した自然との精神的な関わりは変質してしまったことが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：Even though the Okinawan folkly space 'Utaki' are well known as the unique spatial concept with veneration of nature spirits and ancestors, many of these folkly spaces which had already changed in the postwar period by residents have not established system to preserve.

In this research, I focused today's conditions and matters for consultation of Utaki constructed by 13 moving settlements in Okinawa Main Island.

As results, the aspect theory of 'feng-shui', the sanctity for high land, and the veneration of the god of fire and ancestors are still survive in the local people's mind. But many of them do not know what the sense of awe to nature.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	144,728	43,418	188,146
2009年度	355,272	106,581	461,853
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	1,500,000	449,999	1,949,999

研究分野：都市計画

科研費の分科・細目：建築学・都市計画・建築計画

キーワード：沖縄集落、基地接収、御嶽(うたき)、腰当森(くさていむい)、跡地利用計画

## 1. 研究開始当初の背景

沖縄の集落には、火の神や井戸の神など、地域の身近な神々の根源として、「御嶽(うたき)」がある。御嶽は、集落背後の「腰当森(くさていむい)」と呼ばれる丘陵状樹林地に設けられた、集落開祖の骨が埋葬される場所である。各集落は、「御嶽」及び周囲の樹林地の「腰当森」を心の安らぐ場所として大切にしてきた(写真1)。



写真1

沖縄県外では「鎮守の森」が御嶽に類似した空間といえる。この沖縄の集落が保有する御嶽を中心とした民俗的空間の重要性は、民俗学・地理学・農村計画等の学会の枠を超えて多くの研究者によって広く認められており、中でも戦前の形をよく留め、かつ規模の大きな御嶽に関しては、学術的な調査がなされ、文化財指定等保全のための規制がかけられている。



写真2



写真3



写真4

しかし、研究代表者が沖縄本島内を踏査する中で、文化財の対象とならない多くの御嶽では、戦前とはかなり異なった形で整備されていることが明らかとなった。写真2-4はほんの一例であるが、周囲の腰当森から切り離され、まるで人口構造物や墓標の様な御嶽となっている。さらに、沖縄の祭祀空間は沖縄県以外の神社建築と関係を持たないことが歴史的な事実であるにも関わらず、戦後の再整備では神社建築を模倣する例すら確認された(写真5)。



写真5

原則として各集落にひとつずつある御嶽は、文化財指定がされているごく一部(1割にも満たない)を除いては空間等に対する調

査がなされず、開発規制や管理で行政等による保全の手立てがなされていない。そのため、住民と設計者によって独自の整備がなされてしまっている。

御嶽は琉球王朝時代以前からの沖縄の精神世界の中核をなすものであり、保全が先ず大前提である。しかし、その一方で、戦禍により喪失したものや都市公園の中に取り込まれ再整備を余儀なくされたものもあり、これらの再整備に際しては、現在の原型からまったく逸脱した無秩序な改変を改め、一定の方向性を示すことが必要である。

## 2. 研究の目的

本研究は、本来神聖な不可侵のものとしてあった沖縄の民俗空間の「御嶽」とは、地域の人々にとってどういうものであったのか、またどのように戦後継承されたのかを、集落が基地に接収され、その結果移転や移設、再建を余儀なくされた集落の設計協議過程の議論や実現された形から検証することを目的として行われた。

聖域を対象とした従来の研究は、原型をよく保持しているもののみを対象としてきた。これに対して改変されたものを対象とする視覚は、まったく独自の新しいものであり、これまでも取り組みがなされていない。再整備に当たっての議論や表現を整理することにより、これまでは観念的な精神世界で漠然と捉えられてきた御嶽の意味を、議論という明文化された言葉として部分的にでも「切り取れる」ことは、学術的に非常に意義がある。本研究で得られた結果は、長期的には御嶽及び腰当森の設計や整備に関する指針となり、今後の沖縄県下での実際の緑地保全の方針や今後予定される基地返還用地での都市整備の際の実務面でも大きな役割を果たす。

## 3. 研究の方法

字史や議事録をはじめとした資料分析と関係者へのヒアリング、戦中の出陣式に御嶽前で記念に撮った撮影写真や当時の集落の航空写真等と現地調査の比較を用いて分析を行なった。

## 4. 研究成果

- (1) 再建・合祀過程に見る拝みの概念  
土地の接収により再整備された沖縄の御

嶽等民俗空間の改変パターンを沖縄県宜野湾市、北谷町、浦添市、読谷村の8集落を対象として調査し、傾向を把握した。結果は以下の通りである。

先祖崇拝と自然崇拝が一体となった宗教観を持つと言われる沖縄集落の民俗空間は殿や火の神など先祖に由来するもの、ノロ地など琉球王府時代の祭祀と関係するもの、井戸(カー)など自然の恵みに由来するもの、御嶽のように始祖崇拝と山拝みが交じり合ったものがある。このうち多くの集落で一番位が高いのが御嶽であり、御嶽のない分離集落では火の神や殿が一番高い位の拝み場所となる。

御嶽、御嶽がない集落では火の神や殿に関しては、被害を受けた場合必ず再建がなされており、事例のすべての集落で参詣されている。殿やノロ地も御嶽と同様に被害を受けたものは再建されており、接収の有無を問わず現在も多くが参詣されているが、移動という概念を持たない宜野湾集落では破壊されたまま再建されず、大山集落では現在も残っている2つのうち1つは拝まれていない。この他、土帝君、ビジュルなど明文化された由来を持つ参詣対象は再建されている。

その一方で、カーやアブ、モーなど自然物を対象とした拝みは再建される集落とされない集落に別れる。水が貴重であった沖縄地方において生活の基幹であるカーは広く一般に拝み対象であるが、アブやモーは豊年祭がされていた場所が拝み対象となったものであり、やや特殊なものである。ガマについては、昔から霊的な場所とされているところもあるが、戦争時に避難して助かったことから拝まれるようになった比較的新しいものもある。今回の調査では後者で、現在合祀され拝まれている。

合祀では、戦前の集落の空間には無かったものが新設されている。根屋に関わるものが多いが、これらは戦前根屋の住宅敷地内であったものが、居住地を奪われたため新設された、移転集落特有のものである。先祖崇拝に関係するものは門中を中心とした継承者が現在も明確であるものは再建され、良い状態で保全されていた。

## (2) 移設された御嶽の設計とそれを支える空間概念

実際に那覇市小禄で移設・再建された5集落の「御嶽」の空間構成要素を実測に基づき計測を行なった。その結果、一見、集落を超える共通事項が確認された。移設再建を経験した御嶽では、御嶽の拝む場所が敷地内(一部の御嶽では敷地外も含む周囲の地形中で)一番高いところに設置されていること、そして、正面が南方に向くように(例外的に基地内にある旧集落方向を望む形に)設計されて

いるということである。設計者への当時の集落の建設委員会との設計協議でのやりとりについてヒアリングした中でも、「宗家の方から設計への条件として出てきたのは、香炉の格付けと向き」という回答が聞かれ、これらが重要な空間要素として継承されたことがわかる。

しかし、その一方で、御嶽と一体となってそれらを取り囲む樹林地に対する意見ほどの集落でも集落側からの意見としては聞かれなかった。むしろ、戦後の生活の変化の中で御嶽の禁忌性が失われ、周囲の敷地に対して高所にあり死角となりやすい御嶽内で中高生がタバコを吸うなどの悪さをすることが課題となり、見通しをよくするためにという目的で大きく伐採されるような事例が散見された。唯一、なるべく周囲の樹林を伐採せずに、戦前のままの形を保とうと設計されたのは、県外の建築家、原広司氏が設計に関与した場所だけであった。

沖縄の御嶽を中心とする民俗空間は、自然拝みと先祖崇拝が渾然一体となった非常に特徴的な慣習であったが、都市部にある移転集落では、「根家」など先祖崇拝に直接関与するものは継承されたものの、拝みや禁忌性を介した自然との精神的な関わりは変質してしまっただけである。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

①Hiroko Ono and Hajime Shimizu ; A study of today's OKINAWAN folk perceptions of 'UTAKI' -By tracing the points of the issue in transforming them, at OROKU district in NAHA City, OKINAWA pref.-, Asian Planning Schools Association, 2011.9 (CD-ROM) 査読有り

[学会発表] (計3件)

①Hiroko Ono and Hajime Shimizu ; A study of today's OKINAWAN folk perceptions of 'UTAKI' -By tracing the points of the issue in transforming them, at OROKU district in NAHA City, OKINAWA pref.-, Asian Planning Schools Association, 2011.9.20, Univ. of Tokyo

②小野尋子・清水肇；沖縄本島南部島尻地域の石灰岩地域の集落の伝統的な集落構造と開発の傾向・糸満市集落の腰当森を中心にして、日本建築学会学術講演梗概集 E-2, 建築計画 II, 住居・住宅地, 農村計画, 教育, pp.495-496, 2010-07-20, 東北学院大学

③小野尋子・清水肇；土地の接収を受けた集落の民俗空間の変化と移転・合祀からみた意

義の研究―沖縄県宜野湾市、北谷町、浦添市、読谷村の8集落を対象として―、日本建築学会学術講演梗概集・E-2, 建築計画 II, 住居・住宅地, 農村計画, 教育, pp.611-612, 2009-07-20, 富山大学

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

今後、実際に基地返還を予定している集落も対象となっていることから、研究の成果を生かして、緑地の配置など実際の土地利用計画への提言を行う予定である。今年度も研究の取りまとめを行うとともに、沖縄県及び宜野湾市と協働で市民向けのフォーラムを9月に開催し、研究結果を学会のみならず地域社会の中で還元し、共有していく予定である。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

小野 尋子 (ONO HIROKO)  
琉球大学・工学部・助教  
研究者番号：20363658

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：